

子どもたちの生活実態

(4班)

1. 活動先紹介

武豊町立わかば保育園

武豊町立わかば保育園は、武豊町に住む子供たちの中心に通っている保育園である。3・4歳児から小学校就学前の子供たちが在籍している。広い校庭や遊具があり自然もたくさんある。園で野菜を育てたりその野菜を給食で使用したり普段子供たちが触れ合うことのできない体験等をできるように努めている。

奥田周辺の公園

知多奥田駅周辺にある公園で、周りが住宅に囲まれているがとても静かな場所にある。

知的障害児通園施設 つくし学園

知的障害を持つ子供たちが通う通園施設。乳幼児から小学校就学前の子供たちが在籍している。つくし学園祭という祭りが秋にあり、在籍児童やその保護者によるパフォーマンスや出店などがありとても盛り上がった祭りである。また、地域の皆さんも参加しているなど、地域の方とのコミュニケーションを図っている。

2. 当初の活動目的や目標

私たち4班は、子どもの実態・生活に目を向けて取り組んできた。最近の子どもたちの生活を考えた時、自分たちが昔遊んでいた公園等の前を通っても子どもたちが遊ぶ姿が少なく感じる。遊具も安全性を考慮して撤去されていて遊び場も大きく変化している。自分たちが幼かったころに比べ、また自分たちの親の世代が子どもだったころに比べたら明らかに子どもたちの生活が変化しているように思えた。そう感じたときにいったい彼らは何をしているのだろうとふと疑問におもったのである。今、子ども犯罪の低年齢化と騒がれさまざまなニュースが多々報道されている。キレやすい若者というフレーズも生まれた。報道を見てみるとゲームの普及でバーチャルな世界でしか物事が考えられず、安易な行動に出てしまうが多いとされているが、外で遊ばなくなった子どもたちが屋内でゲーム等に触れる機会が多くなり、昔と比べこのように変化しているのではないかと考えた。

そのような中で、子どもたちの生活の変化により教育現場もどのような問題が生じ、また何がひつようとされているのか社会の変化による教育現場の変化を捉えたいと考えた。教師としての役割を、子どもたちや保育士さんからすこしでも考えていきたいとおもったのである。社会が複雑化し、その中で生きる子どもたちにとって何が必要とされているのかを考え、どのような問題が起き、子どもたちと教育現場・子どもたちと現代社会といったさまざまな目線から子どもたちの生活を捉えて生きたいと考える。

また、障がいを持つ子どもたちに目をむけることで、さまざまな子どもの様子を知ることができると考えこのようなフィールドワークを行うことにした。

3. 自分たちの活動内容

〔武豊町立わかば保育園〕

保育園にいき、実際に活動に参加し保育内容を見る。また、子どもたちと触れ合い、普段の子どもたちの様子を見て、どんなことに興味があるかなど子どもたちからも話を聞く。先生方から、昔のこどもたちのようすとの変化、保育園で取り組んでいることや、時代が変化したことにより保育園自体変化したこと等話を聞き、現代社会と保育園のつながりを調べるという事を目的に訪問させていただいた。

保育園のいつもの一日の流れに沿った形で活動させていただいた。4歳児(もも組)と5歳児(みどり組)クラスに2、3名ずつ入り午前中は絵本をともに読んだり、室内で遊んだ。

給食の様子を拝見させていただき午後からは外での遊びをした。子供達は各々だるまさんがころんだや、滑り台、遊具等で好きな遊びをしていた。その後、おやつには珍しいそらまめを保育園側が提供しておやつタイムを過ごした。

〔公園調査〕

遊具の安全性を調べ、私たちが遊んでいた頃と変化があるのかを調べる。公園周辺の調査をしどのような場所に遊び場があるのかを知ることによって保育園で調査した問題点等の答えを見つけ出すことを目的に行った。

実際の遊具を見て変化や、公園の立地場所について調査した。

〔つくし学園〕

障がいを持つ子どもたちが、どのように生活をし、障がいを持つ子どもたちにとって、どのようなことがのぞまれているのかを考え今までの調査と比べてみる。そして、いままでのまとめとして多くの子どもたちの生活を知ることがを目的に調査した。

11月2日に行われたつくし学園祭のスタッフとして参加した。出店や手作りの遊具等の管理をしてスタッフとしてであったが子供たちとたくさん関わることができた。

11月12日には施設のいつもの一日の流れに沿った形で活動させていただいた。2歳児・3歳児・4歳児・5歳児のクラスにそれぞれ入り活動した。各クラスの在籍児童は7人くらいである。

3歳児クラスでは、はじめに遊戯室で、お買い物のごっこや滑り台などの体を使った遊びをした。次に教室で、さつまいもでできたスタンプでクリスマスツリーに飾りつけをしたり、絵本やおもちゃで遊んだ。

5歳児クラスでは、午前中には、朝の会で出席を取り、室内で遊具を使って遊んだ。作業遊びでのりやはさみを使う作業をした。その時に一人一人廊下に出て先生と一対一で行った。

4. 活動における問題点・課題

活動をしていくうちに、保育園の生活では見ることのできない子どもたちの様子をみた

いと考え、保育園に通う親さんにアンケート調査を行いたいと考えた。その旨を保育園に伝えたところプライバシー保護が厳しく、生徒の内容に関する資料を外部に出すことは難しいし、保育園側も勝手な判断で外部(私たち学生)と関わることはできないと言われてしまった。プライバシーの保護という問題に大きくぶつかりなかなか話ができなくなってしまった。本来行いたかった調査が思うようにできなく困ったことも多々あった。この問題から、事前に資料や注意文、正規のルート等をしらべるなどしてから保育園等に働きかけるひつようがあったと考える。

5. 結論活動を通して学んだこと、理解したこと、成長したこと

今回のフィールドワークを行い、子どもたちの生活の変化には人同士のつながりの疎遠化されてきたことが理解できた。わかば保育園を訪問した際に園長先生が、「最近では怒られるなんてことされない。」といい、また私が印象的だったのが、「親でさえ叱ろうとしない。親自身何が悪いのかわからない」という話である。叱る、今こんな事をしてくれる大人がどれだけいるだろうか。また、この事で気づいたことは、子供たちの安全を守るためには、大人の目が必要であるということ。子供たちを外で遊ばせたくても、見守ってくれる大人がいない。だから、必然的にだれかの家になってしまうのである。私が小さい頃は、お寺のお坊さんが私たちを見守ってくれた。それぞれの親は、仕事や家事で忙しくとても時間を作ることができなかったが、その変わりお坊さんが見守り、危険な時は叱ってくれた。今はそんな大人がいるのだろうか。他人の子供の面倒を見てくれる大人・そんな近所付き合いが、外で遊ぶ子供たちを見なくなった理由の一つではないかと思う。

また、公園調査を行い私がまず驚いたのは、ブランコが椅子の形をしていて、安全のバーみたいなのがあったことである。ブランコと言えば平らな椅子にチェーンが2本あるだけのしか私の地元の公園になかったので、ジェットコースターの安全バーみたいなのがありとても驚いた。あと、ブランコのチェーンが、鎖状なのは変わらないが、その一つ一つの鎖の穴の間隔が自分たちが乗っていたブランコよりも小さい気がした。指を鎖に挟まないようにするためなのだろうと思う。確かに、自分が小さい頃は何度もブランコの鎖に指を挟み痛い思いをした。

このように、安全面が考慮してあり、自分たちが遊んでいた遊具とは少し違っていた。だが、これはプラスになったことなのに、なぜ子どもたちは外で遊ばないのだろう。

それは、やはり地域の目であると感じた。その公園は民家に囲まれていたのにも関わらず、私たちが公園を調べている間ほとんど地域の人に出会うことがなかった。車はしばしば通るのだが、人には逢うことはなかった。確かに、お昼から夕方にかけては、会社や家事で忙しい時間なのかもしれないが、でもこの時間はちょうど保育園も終わり子供たちも遊ぶ時間なのだし、その時間に人通りが少ない公園に子供たちを遊ばせるのは怖いと思った。せつかく公園は安全面に考慮し改良してあると感じられたのに、その公園で誰も遊ぶことはないのはさみしいことだと感じた。

これに通じて、障がいを持つ子どもたち、施設では彼らのペースで自分たちにあった時間をすごしている。そこにはやはり他者の目が行き届いているからだと感じた。常に子どものペースにあわせている保育士さんがいて、彼らにあった保育内容を考えているのである。だが、外にでればのびのびと過ごすには大きな壁があるように感じた。親だけではなく周りの人が彼らのことを理解しなければならないと思った。

このように他者とのかかわりが希薄化した現代の中で保育園・通園施設という場がとても大切な場であると感じた。叱ってくれる先生がいる、走り回れる場所がある、子供たちが安全でいられる場所なのだ。安全を守るために子供たちの行動範囲を狭め、人のつながりが質素になったことにより子どもたちのことを考えてくれる人が減った。こどもたち自身も、ゲームという相手に夢中になり、人の世界に入ってしまう。だから、保育園という場所が彼らにとって多くのものを得られる場所だと感じた。いったような学級もひらかれ、保育園もさまざま努力していると感じられた。園長先生がおっしゃった、「保育園のときにできた物が、一番影響しやすくてたいせつだと思う」という言葉に私は、確かに、初めて社会というものに触れた子供たちが、そこでどのような生活を送り、小さいなりに得たものが基準となり小・中学校へとあがって行くように感じた。

今回の活動を通じ、教育現場には、彼らが保育園・施設を離れた場所で何が必要なのかを捕らえ、それらを教育現場に反映させていかなければならないと感じた。幼児期という好奇心旺盛で、多感な彼らにとって多くの学びは本当に必要であると感じた。

そして、保育園と通園施設をおとつれて考えたことは、障害を持っていても、持っていないでも子供たちの周りには一人一人さまざまな環境の問題が挙げられそれと向き合い、彼らに必要なと思う事を教育現場で提供することが必要であると感じた。

6. 次年度活動する学生へ

興味を持ったことをやりたいようにとことん調べられるという点でサービスマーケティングは魅力的である。学校の講義だけではなく、実際に自分たちの目で見るということは多くのことを得ることができる。また、共通の問題意識をもった仲間とともにしらべられるということで、自分では気づくことができなかつた新たな視点から物事を考えることができ、新たな発見をすることができる。また活動先にアポを取るなど、自分たちで行うことで基本的な礼儀や文書の書き方等学べる。このことは自分にとって大きいことであつたと振り返る。学校内ではゆるかったことでも活動先の方に迷惑をかけないように行ったりと気をつけることが多く普段ではできない体験ができた。また、活動先の現場で働く方々から大変貴重なはなしを聞くことができ、ただ聞くだけではなくこちらからも質問したり等をしてコミュニケーションをとることで考えを深めることができた。

来年度活動する皆さんは目的意識をもって活動すれば多くのことを得ることができ充実した活動になるようにしてほしい。(阿部)